

1994年2月に“LONG VACATION”の3rdアルバムのレコーディングがパリで行われた。これは、その合間をぬって敢行された短編映画「ポンヌフから45分」のロケの全貌である。監督は、1stアルバムのベルリン以来、ロンバケを撮り続けている久保山努である。

その日まで—東京

1993年 初夏

「“LONG VACATION”の3rdアルバムのレコーディングはパリに決まった」と久保山氏から聞かされる。

私は、ごく普通の会社員であるのだが、6年程前、久保山氏がチーフ・ディレクターを務めていたスタジオでアルバイトをしたことがあり、それ以来、ことあるごとに参加させてもらっている。

前回のハワイでのロケでは、私は都合があって撮影そのものには参加できなかったもので、次はぜひと再三お願いしていたのだ。現段階では9月に予定されている。

1993年 晩夏

パリ行きは、どうやら年を越しそうである。私の方はいつでもいいという訳にもいかないなので、やきもきする。まあこればかりはなかなか予定通りとはいかない。

1993年 10月

パリでのレコーディングは、1月か2月くらいになるとのこと。

1993年 12月

ようやくスケジュールが出る。レコーディングは2月1日から1カ月。

撮影は、多少落ちついてくる下旬に予定するとのこと。

久保山氏から3rdアルバムがどういう感じになるかわからないのだが、プロモーション・ビデオというよりも短編映画のような感じでいきたいと聞かされる。映画というからにはフィルムで撮影ということになるのだが、ビデオでやるにしろパリは撮影にうるさいとのこと。三脚を立てようものなら、すぐ警官がやってくるそう。ならば小回りのきく体制が前提となる。

ということで、1st VIDEO“LONG VACATION’S SKETCH”でも一部使用した SUPER-8 を使用するつもりだと久保山氏から聞かされる。

1994年 1月

久保山氏はベルリン映画祭に行くとのこと。イラストレーターの三留まゆみも同じスケジュールで行くらしい。

ちょうどパリ行きの直前なので、彼が以前、アボリアッツ映画祭の時に一緒に仕事をしたという、ベルリンのドイツ人カメラマンに話をしてみることになる。前2作は、撮影も久保山氏の手によるものだが、今回は別の視点

になって面白い結果が期待できるのではないか。SUPER-8 を基本線として置きつつ、彼らがやってくれるのであれば、場合によっては、つまり予算と日数によるが、16mm でも実現できるかも知れない。海外のカメラマンは媒体を問わずビデオでもフィルムでも何でも使えるのが普通らしい。なんとも頼もしい。

久保山氏の映像イメージも徐々にまとまりつつある。

- ・パリのホテル 早朝 バスルームのKERA おもむろに拳銃を取り出し 自分の頭を打ち抜く
- ・中野テルヲを塚本晋也の“鉄男”的な金属感のあるイメージにする。

どうやって実現させるかは、私が担当することになる。

それらと並行してロケ地のあたりをつける。テーブルにパリの地図をひろげ、パリのガイドブックを見ながらあれやこれやと印をつけていく。観光地めぐりにならぬよう、かといってパリとわからなくては困る。凱旋門、エッフェル、ポンヌフ、自由の女神を押さえて、絵的に面白いところを捜していく。久保山氏が屋根の上などでも撮影したいとのこと。あとは現地入りしてからのロケーションハンティングで具体的に決め込むことになる。

自殺のシークエンスに関して、いろいろ考える。火薬は使えない、拳銃は小型のリボルバーがそれらしい。血しぶきはエアータンで等など。ロケ地選定の参考に、パリを舞台にした映画をあらためて見まくる。特に日本映画を気にする。“フランティック” “サブウェイ” “エロティックな関係” “アラカルト・カンパニー” “ポンヌフの恋人” “勝手にしやがれ”ドイツ・ベルリンから久保山氏宛に電話。ベルリンのカメラマンのドラゴ・ラドゴスピッチとその助手のボリス・ベッカーは、今回の撮影にけっこう乗り気とのこと。

2月 初旬

ロンバケの面々は、2月1日に日本を発った。

久保山氏はベルリンに寄るため、私より1週間早く出発するので、国内での準備の確認を重ねる。

KERAの自殺シーンのテストをビデオで撮影し、久保山氏に見てもらう。まずまずの出来とのこと。

中野テルヲの鉄男化計画のラフ・デザインを描いていく。サイバーパンクSF的な味付けをしてみる。電子楽器用シールド・ケーブルも使うことにする。

オープニングの構成が決まる。

- ・レコーディングのためにパリに集まってくる3人。KERAは、普通に飛行機で。中野テルヲは、どこか他の国から列車で。みのすけは徒歩で。

2月 10日

久保山氏は通訳の天野恵理子とともにベルリンへ。状況は逐一連絡してもらおう手はずになっている。私は小道具等を仕上げるため東急ハンズや秋葉原を歩く。

2月15日

ベルリンの久保山氏からTEL。カメラマンのドラゴとその助手のボリスとの打ち合わせの結果、二人を起用することにし、撮影も16mmで行うことに決定。久保山氏と天野は明日パリに入るとのこと。

2月16日

久保山氏からTEL。パリからである。ベルリンとくらべて、そんなに寒くないこと。一人で黙々とロケハンをしていること。今回のアルバムのデモを、KERAにもらって毎日聞いていることなどを聞く。1曲、電話口で流してもらおう。エンニオ・モリコーネの“太陽の下の18才”をカバーしている。いい感じ。

そして - パリ

2月19日 土曜日

いよいよ出発である。空港までマルチブレインズの武田さんが送ってくれる。時間通りにチェックインを済ませて、武田さんと別れる。手荷物検査の際、自殺シーン用のエアボンベが引っかかり、機内へ持ち込めず航空会社の窓口預かりになってしまう。事前の調査では機内持ち込みにすればOKだったはずなのだが。まあ、パリならエアブランのボンベはあるだろうと思う。

パリCDG空港到着 現地時刻 PM6:00。緊張しているので、ほとんど眠れず、気分は日本にいるままゲートをくぐる。監督の久保山氏と通訳の天野恵理子がベルリンでの打ち合わせを済ませ迎えに来てくれているはず。ところが、税関で軟禁され、小一時間の押し問答の末やっと解放。トランク一杯のフィルム等、およそ観光客にみえない数々の品が原因。そして、またしても小道具の拳銃が没収される。トイガンではあるけれど危険だと思われたらしい。

問題の拳銃も、ものは考えようで、指で拳銃のまねをして、本当に死んじゃうということにすればよい。かえってひねくれてて面白い！と監督のアイデア。

昨日、久保山氏はコーディネーターのティエリー・モルマンと撮影に関しての打ち合わせは済ませている。ホテル(NOBOTEL BAGNOLET)にチェック・イン後、気を取り直してオペラ座界隈に夕飯を食べに行く。夜の街を歩いても、やはり、いまひとつパリにきた実感がわからない。生牡蠣を食べたがあまりうまくなかった。

ホテルに戻り多少気分も落ちついたころ、KERAから Tel。ロンバケサイドのスタッフが今スタジオに全員いるのでさっそく衣装等の打ち合わせをしようとのこと。

なぜか、久保山氏と私、スーツに着替える。実はフランス料理のフルコースを食するためにスーツを持ってきたのだが、時間がとれないまま着ないかも知れないので一度は袖を通そうという訳なのである。

私たちのホテルとスタジオは割と近いので、せっかくだから街の雰囲気や味合うために歩いていくことにする。

私の手には、差し入れとして日本から持ち込んだササニシキ2Kgと数々の和食材。こんな夜中にスーツ着た日本人二人が人気のない路地を歩いているのは、かなり奇妙。

ロンバケの3人、メイクの犬山犬子、衣装の尾島千夏子、とお馴染みの面々が顔をそろえる。みのすけは不精髭がぼうぼうである。さて衣装だが、当然前回の“SUMMER PLACE”のハワイとは、がらりと雰囲気を変えるべきなので、なるべく落ちついた色調の服装にすることに。手持ちだけでは、バリエーションが足りないので、明日の蚤の市で古着を捜してみるとのこと。

2月20日 日曜日

目覚めて窓の外景色を見てパリに来ていることを実感する。

AM10:00 ごろ、ホテルの近くのマクドナルドで遅い朝食。午前中はホテルの部屋で、中野テルヲの鉄男化計画の仕上げをする。サングラスに豆電球を仕込み、模型用の塗料で色を塗る。特殊部隊が使う赤外線スコープのイメージである。窓の外はいつ降り出したのかけっこうな雪。パリの雪景色も絵になる。撮影の時も雪がほどよく残っていると面白いだろう。

昼食は、オペラ座界隈のそば屋。パリでカツ丼やたぬきそばを食べるのもおかしい。少しぶらぶらした後、スタジオへ顔を出しに行くことになる。コーディネーターの宍倉さんが休みとのこと。彼女は食事係でもある。今日は久保山氏と私が作ることに。久保山氏の作る料理はロンバケのメンバーに好評で、1st アルバムでは“Super Cooking”ともクレジットされている。

近くのチャイニーズが経営している食料雑貨屋へ買い出しに。日曜日でもやっているのは助かるのだが、肉が手に入らなかったのも、玉子丼とする。メンバーの面々は日本食はすっかりごぶさたなので、ちょうどよいだろう。特に米が喜んでくれたので、日本から持ってきたかいがあった。

ホテルに戻って夜遅く、ベルリンからカメラマンのドラゴとその助手のボリスが到着する。10時間くらいで来てしまったようだ。打ち合わせもかねて、ホテルのレストランでまた飯を食う。明朝9時集合を約束し、部屋に戻って就寝 AM1:00。

2月21日 月曜日

今日はドラゴ、ボリスを交えて、終日ロケハン。ロンバケのできたてほやほやの DATを聞きながら、イメージを湧かせつつパリの街を走る。途中、久保山氏がベルリンで手に入れたモンティ・パイソンのCDも聞く。“I Like Chinese”を大合唱する。

昼食の後、ボリスの姿が見えないと思ったら、路上で売っているピスタチオを買い食いしている。

夕方、久保山氏はコーディネーターの仏人のティエリー・モルマンと合流すべく一足先にホテルへ。ドラゴ、

ボリス、天野の3人は、ポンヌフあたりの光量を測りに、私も成田で奪われた機材の代用品を捜すべく、リュブブリック広場界隈を歩く。パリで一番大きな画材屋を見付けるが、規格が違い使えず、あきらめてホテルに戻る。

ようやくティエリーから Tel. ティエリーはこれまたアボリアツツ映画祭で久保山 氏と仕事をしている。今回はパリを熟知しているし、車の運転もOKということで 抜てきされた。まず、3人でレンタカーを借りに行く。夜、撮影スタッフ一同で、スタジオを訪ね顔合わせをする。その後、ロケハンもかねてチャイナ・タウンで夕食。もちろん中華料理である。久保山氏と私はどこの国でもまず中華料理の人なのである。明日はいよいよ撮影。それに備えるべく、ひたすら食べる。イラストレーターの小留まゆみから久保山氏に Tel. 風呂に入っているの、またかけてもらうことにする。パリに来ているとのこと。

2月22日 火曜日

撮影第1日目。AM8:00 撮影スタッフはホテルロビーに集合。コーディネーターのティエリーの運転するレンタカーを先にドラゴ達のワゴンと2台で、ロンバケ達の宿泊するヴァンセンヌという街のアパートへ。早朝まで作業をしていたメンバーもいて眠そう。それでもメイクを済ませているのはさすが。前日に打ち合わせた通り、サクレクール寺院へ向かう。私はロンバケメンバーを乗せたティエリーの運転する車に乗り込み、後ろをついてくる久保山氏とランシーバで連絡をとりながら移動する。

ファースト・カットは、サクレクール寺院の正面下の長い階段でのロンバケ3人。上から下にいる3人を狙った縦構図の絵。オープニングで3人が合流するシーンである。ドラゴとボリスがアリフレックスの16mm カメラを三脚に据える。こうして見ると、“映画”のロケだという実感が湧き気持ち昂揚してくる。

セッティングしつつ、KERAが場当たりのために位置につく。とりあえず、立って待っているだけなので、かなり寒そうである。演技としては階段を自然に登ってくるだけで、歩くスピードを調整してリハーサルはOK。

・パリの空。カメラ、パン・ダウンして階段をのぼってくる3人

次はここから歩いてすぐのテルトル広場。別名、画家広場と言われる通り、観光客相手の画家がひしめいている。我々撮影スタッフが段取りを決めている時、ロンバケ3人はサンドウィッチを買いに行く。せつかくこの雰囲気だからと、ほおぼっている3人を急遽撮ることにする。

ここでは、“操行ゼロ”を、1曲まるまるワン・カットで撮ることになる。曲間で適当にKERAにリップシンクロしてもらう。そのため私はDATウォークマンをウェストバックに忍ばせ小型のスピーカーを手を持って曲を流す

のである。

- ・ロンバケ3人 KERAは一部歌いながら広場を歩き廻る。
- ・ドラゴ カメラを肩にかつぎ追う。
- ・ボリス ファインダーをのぞいて左右が見えないドラゴのベルトをつかんで誘導する。
- ・私 その後ろをDATで音出し。
- ・犬山犬子 さらにその後ろを万が一間違わないように歌詞を大声で読み上げKERAのロパクのサポート。

といった編成で、リハーサルなしでスタート。冷静に見つめるとかなり気違いじみた様子だろう。ロンバケ3人はアドリブで自然な演技もいれる。画的な変化をつけるため、カメラはロンバケ3人の前後左右から廻り込んだりしながら撮るのだが、ドラゴの後ろについている我々3人はフレームから常にはずれていなければならず、せまいスペースで息を切らせながらついていく。私などは、画家の一人のイーゼルを蹴飛ばしたらしい。後で知ったのだが。

雲の影と直射日光があたるところのコントラストがきつく、風が強いので状況がすぐ変り、多少絞りの調整に不満が残るとドラゴが言うが、久保山氏が編集時にカバーするというので、OKを出す。

その後、いくつかのピック・アップ・ショットを押さえておく。いわゆるロンバケ3人の主観。そして、昨日ボリスが買ったピスタチオの残りを蒔いて、地面に置いたカメラの前にハトを集めて撮る。この場所での撮影は以上。

凱旋門へ移動する。

ここでは“太陽の下の18才”のイントロから始まるカット。ロパク(リップ・シンクという)あり。

- ・曲のイントロとともに画面奥から三人がカメラに向かって歩いてくる。
- ・歌いながらカメラの前を通り過ぎる。
- ・カメラは歩き去る三人を右にフォローパンして、姿が小さくなるまで撮る。

以上をワン・カットで。曲のテンポに合わせて、足どりは速く。ここでは、このカットで終了。

シャンゼリゼ大通り沿いのサンドウィッチ屋で昼食。時間が気になるが、まずまずの進行状況だろうと、久保山氏。みのすけはトイレで衣装換え。さっさとすまして次の場所へ移動することにする。ルーブル美術館のピラミッドの広場で3人がそれぞれ歩くカット。今日は休館日なので、人もまばらで都合がよい。

- ・KERA ピラミッドに沿ってカメラに向かって歩き、角を曲がって去っていく。
- ・みのすけ 小さい方のピラミッドをバックに歩く。多少望遠のフレーム。
- ・中野テルヲ ピラミッドをバックに画面、下手から上手へ歩く。かなりロング。このカットは、空の露光が高いので、ND フィルターを使ってカバー。

以上3カット。警備員がやってくるが、ちょうど撮り終えたところだったのでセーフ。言われる通り、素直に撤収する。

ポヌフへ移動。橋の途中にいくつかベンチの様なスペースがあり、そこで“太陽の下の18才”のサビのリップ・シンク。KERAがひとりで歌う。

- ・カメラ 橋から見たセーヌ川の全景をとらえる。
- ・カメラがトラックバックすると、ベンチに立つKERAがフレーム・イン。
- ・サビの部分を歌う。

テンポをよくするためKERAがフレーム・インした時には、ずり上げ気味に歌っていないなくてはならないのでタイミングが難しい。ドラゴは、曲を聞きながらすばやくトラックバックしなければならない。何度カリハーサルをして臨むが、タイミングが合わず、またカメラがぶれたり、途中でフィルムが終わってしまったりして、5テイク撮る。

フィルム・チェンジをしている間に、大きな音を聞きつけたのか、日本人の女の子がやって来て、KERAと一緒に写真を撮っていく。ちょうど卒業旅行に来ていたらしく、こんなところで、思いがけずKERAに会えるなんてと興奮気味に去っていく。

続いて、橋の欄干に座ってギターをつま弾くみのすけ。曲と曲の間にインサートするスケッチ・ショットである。ロングで狙う。堂々と三脚を使うが日本にいる時に聞いてきた心配も取り越し苦労で済む。私は、みのすけの足元に隠れて、ギターの音を収録する。橋を通る車の音がひどく、後で使えるかどうか少々心配になる。画の方は絵画のような感じで格好良いとのこと。できあがり楽しみである。

橋のたもとの古本屋の屋台で、古い写真等を見ながら歩く3人。休日に街をぶらついていイメージである。みのすけが持っているのは、私が出た大学の映画研究会から借りたキャノン 518 という 8mmカメラ。フィルムが装填されており、後々使えるかも知れないと撮影中にも実際に撮ってもらおうよみのすけに頼んでおく。古本屋台のおやじが撮影するなら金を払えと要求してくるが、無視して続ける。カメラを地面に置いたりして、何パターンか撮る。次も同じイメージで、屋台で焼き栗を買う3人。みのすけのキ

キャラクターで、すべて日本語で注文する。“すみません。これ、3つ下さい。”音も同時収録したのだが、品位的にいまひとつ。残念。

暗くなってきたので、カフェで一息。皆が談笑している中、久保山氏と離れたテーブルで今後の段取りを決める。消化したカット。フィルムに残り等々。

夜、タクシーに乗っているKERAを撮る。空港についたKERAが、市街のホテルへ向かっているというイメージである。ティエリーがタクシーをつかまえて、運転手と交渉し、セーヌ川沿いの高速道路を走り、適当なところでもどってきてもらうことにする。このカットから、ISO400の高感度フィルムを使う。400ftしか用意していないので夜間のカットは今日中に消化しなくてはならない。せまい車内の、助手席にカメラをかついだドラゴ、後席、左にKERA、右に照明を持ったボリスが乗り込む。ボリスは身長が2mくらいあるので、かなり無理な体勢で潜り込むことになる。これ以上は乗れないので、このカットはドラゴにまかせて、次の準備にかかる。

私はワゴンの中で犬山、尾島の協力のもと、日本で作りこみパリで仕上げた赤外線スコープ風サングラスや金属パイプ、ちぎれたシールドなどジャンキーな物を、中野テルヲ氏のおでこやら首筋にいろいろ貼りつけていく。

金属パイプは、撮影中とれてしまうと、直す時間が惜しいので、NGにする。赤く光る眼を見てボリスがターミネーターみたいだと言う。そしてポンヌフの地下鉄の駅へ。ここでは“マダム・エピステーメーの消息”。一部リップ・シンクあり。まず、3人それぞれのピックアップ・カットを撮る。

- ・ホームに入ってくる地下鉄。カメラ、パンして、
- ・ロンバケの3人。地下鉄に乗り込む。
- ・カメラ、その動きに合わせて、乗り込む。
- ・走る地下鉄の中でKERA歌い始める。

以上、ワンカット。ここでもホームから地下鉄の中まで、スピーカーをがんがん鳴らしながら撮る。いきなり、変な輩が乗り込んできたのを見た乗客の反応が面白い。続いて、地下鉄が次の駅でとまり始めてから、3人が降りてホームを歩き去っていくのをワンカットで。

今度はこの駅の長い地下通路を使って、颯爽と歩く3人。ドラゴのだめ出しで2テイク押さえてOK。しかし、中野の赤く光る右眼は画面で確認できるのだろうか？ ちょっと心配になる。その後、ホームの監視モニターに映る3人を撮って終了。PM10:00。

次は、KERAがホテルのバスルームで、自殺をするシーンである。場所を我々の宿泊するホテルの部屋に移動する。画角をかせぐため、ポリス達はバスルームのドアをはずしてしまう。照明はバスタブに設置し、カーテンで隠す。成田とCDG空港で、仕掛けを失ったままなので、血しぶきは、私が血のりをいれたゴムのパイプを口で吹くことにする。しかし、パイプが長すぎたせいもあり、血しぶきにならず。2テイク撮ったが、結局NGになってしまう。東京でそれなりに準備をしてきたのだが、不本意な結果に終わってしまう。貴重なフィルムも無駄にし、1日の最後としては非常にくやしい。

結局、今日はここまで。ロンバケ・メンバーはティエリーの運転で帰っていく。我々、撮影スタッフはホテルのレストランで遅い夕食をとる。先程のNGのせいであまり喉を通らないのだが、久保山氏の慰めで救われる。ここで落ち込んでいても仕方ないのだ。

部屋に戻って明日のための打ち合わせ。明日1日しかないので、ロケ地をさらに絞り込む。緊張しているのだが、やはり疲れているので、すぐ眠りに落ちてしまう。AM3:00。

2月23日 水曜日

AM7:00 なかなか目が覚めない。そんな時、コーディネーターのティエリー から Tel。以下その会話

ティエリー 「きたさんですかー おはよーございまーす」

私 「はい おはようございます」

ティエリー 「ちょっと大きな問題が起きましたねー」

私 「なんでしょう？」

ティエリー 「あのですねー レンタカーのバッテリーがあがって動かなくなりましたね どうしたらいいですかねー」

私 「どうしたらって・・・えーなんだってー」

というわけで大変なことになる。久保山氏は目を覚ますために風呂に入っている。私の半眠状態の判断で、こちらから連絡をとりやすいロンバケメンバーと合流するよう指示し、そのことをドア越しに久保山氏に伝えたが、半眠返事だ。私はトイレに入って頭を回転させようとする。

30分程して、メンバーと合流したティエリーから Tel。我々も移動してレンタカーを止めている場所で、落ち合うことにする。久保山氏とあれこれ対処方法を考える。レンタカー屋に連絡すればすぐ対処してもらえるのか、代わりの車の手配は可能か？等々。

とにかく、ティエリーから聞いた住所へ急行するが、レンタカーも、メンバーもティエリーも見あたらない！

そばのカフェの窓際にみのすけを発見。メンバーも無事そろっている。どうすることもできず朝食をとっていたところ。ティエリーもその店の地下で電話をしている。悪いことは重なるもので、レンタカーはレッカー移動されて、モンパルナスの警察署に保管されているとのこと。

こうしていてももちがあかないので、とりあえず機材車に乗れるだけ乗って、撮影を開始しようということになるが、衣装やみのすけのギターがレンタカーに入れたままになっていたのに気づく。結局、モンパルナスの警察署にむかうことになり、撮影そのものにさほど影響がない通訳の天野は、ここで別れてホテルで待機することになる。

メンバーはわりと冷静なのだが、我々はいらいらする。

既に予定よりの2時間遅れてしまっている。

モンパルナス警察署で衣装等を受け取るが、ティエリーはよほど慌てていたらしく、みのすけのサングラスをダッシュボードに置き忘れてしまう。そのことも含めて、彼は後の対処をすべく、ここで別れる。正午にエッフェル塔の下で待ち合わせをすることにする。状況は、ホテルの天野に連絡することにする。気を取り直し、東駅へ向かう。

東駅では、中野テルヲが列車でパリに到着するシーンを。長距離列車は車中で切符のチェックをするらしく、ホームまで入っていける。

- ・ホーム奥から、カメラにむかって、中野テルヲが歩いてくる。
- ・カメラ前で、方向を変え歩き去る。
- ・カメラ パンして後ろ姿。

以上ワンカット。

カットの始めは、ロングになるので、大声を出さずにスタートの合図を送るため、中野自身がトランシーバーを持つことにする。リハーサルをして、3テイク撮る。

場所を変えて、エンタランス・ホールから駅の外に歩き去る後ろ姿。ローアングルで多少アオリ気味に。前のカットもそうだったが、堂々と三脚を使ってる。

ちょうど撮り終えた時、頭のいかれたチンピラがからんでくる。「俺のことを撮ったのなら殺すぞ」などとすごむが、ドラゴがあっさりとしらう。つばをはいて立ち去るのを見てボリスが”マザーファッカー”と一言。多少ひやひやする。

ここで、しきり直しかねてカフェで休憩。朝からぱらついていた雨が少し強く降り始める。時間のことを考えたら、軽くすませたいところだが、ドラゴ、ボリスとも少し落ちつこうと言う。久保山氏と私はそうもいかず、パンを一口食べたなら、もう出ようという感じ。ホテルの天野に電話をするが、ティエリーからの連絡はないと言う。

パリの西にある、自由の女神に移動。“太陽の下の18才”の2コーラス目のサビ。リップシンクあり。

- ・自由の女神の下からのアオリ。
- ・カメラ、ティルトダウン。
- ・奥にKERA、中野。画面、手前の下手にみのすけ。
- ・みのすけ、なにかを拾う。

以上をワンカットで。

ここは、R・ポランスキーの“フランティック”のラストシーンでも使われた場所。画面ではわかりにくいですが、みのすけが拾うなにかは、その映画にヒントがある。映画ファンだったらきっとにんまりするだろう。少し場所を移動して、自由の女神の後ろ姿をバックに、これまた後ろ姿の3人。印象的な画。カメラはローアングルでのFIX。

ここでのカットは以上。

エッフェル塔へ移動。その下の回転木馬に乗る3人はどうかとドラゴは言うが、子供っぽくなる気がするのと、係員に法外な額の金を要求されたので却下。エッフェル塔をバックに入れたいため、少し離れたシャイヨー宮で歩く3人。

私はティエリーを待つため途中で車にもどり、この間に、回転木馬の音楽を収録しておく。とてもパリっぽい音なので、使えるかも知れない。約束の時間から1時間たつがティエリーはまだ現れない。時間を無駄にできないので、次へ向かう。

昨日のサクレール寺院の階段のちょうど反対に位置する路地。

- ・みのすけ、スーツケースを手に歩いてくる。
- ・道に迷っているらしく、立ち止まり地図を広げ辺りを見回す。
- ・また歩き角に立ち去る。
- ・その方向から同時にKERAが登場。“プラスター・プレイス”歌い始める。

以上、曲終わりまで2シーン・ワンカットで。

カット始めの、みのすけはオープニングのつながりになる。ちなみに彼が持っているスーツケースは私のもので、中には昨晚の中野テルヲ鉄男化グッズが入っている。広げて見る地図はボリス達がベルリンから来る時に使ったフランス全土地図。道に迷うのも当たり前なのだ。KERAは、全編リップシンクである。

その後、みのすけが一人で歩くカットを撮り、ここは終了。

セーヌ川の遊覧船でのカットを撮るためポンヌフにむかうが、高速を逆方向にのっ
てしまう。パリの北東のラ・ヴィレットのあたりまで来て、気づいて高速を降りるが今度は渋滞につかまってしまう。
雨があがりきれいな夕焼け空になり、光量をさほど心配しなくてもよいかもと思うが、渋滞はかなりひどく、途中
で断念する。

明日は、ドラゴ達は次の仕事のためベルリンに帰らなくてはならないのだが、それを遅らせて午前中に撮り
終えようとのこと。少し安心してそれぞれホテルに戻る。天野にはティエリーから連絡なし。

夕食はボリスが予約していたフランス料理の店で。以前パリに来たときに、目をつけていたのだそうだ。ロン
バケメンバーもKERA、中野、犬山が参加。

メニューはさっぱりわからないが、ボリスはフランス語もできるので、皆、彼に頼んでなんとか注文する。

ホテルに戻ると、ドラゴ達が飲もうと言うので、下のバーでビールを。おやじがピアノで、“赤いスイートピー”
など弾いて、日本人観光客に媚びている。

最近読んだマイケル・クライトンの小説のこと、ドラゴは4才のかわいい娘となかなか遊んでやれないこと、日
本の家賃は高いこと、等々、他愛もない話しに盛り上がる。なんやかんやで、店がしまつて、電気を消されても
いすわって、勝手にカウンターまたいで水などかじっていたら AM2:30 になってしまった。
さすがにそろそろと部屋にもどる。部屋で明日の打ち合わせ。AM3:30 に眠りにつく。

2月24日 木曜日

AM9:00 ポンヌフの銅像の下で集合。この銅像は“ポンヌフの恋人”で ジュリエット・ビノッシュが登ったとこ
ろ。もっとも実際の撮影はセットだったれども。ロンバケのベースギター担当の中村“MU”哲夫が遊びに来て
くれる。セーヌ川をゆく遊覧船の上で3人が歌うところを撮りたかったのだが、屋根のないオープンタイプの船
の時間が合わず断念。昨日の道を間違ったことといい、このことといい、ティエリーがいないせいだ。

結局、橋の下の中州(シテ島)の先端付近で撮ることに落ち着く。ここでは、休日を楽しむ三人。ぜいたくに
廻す。みのすけと中野テルヲのアドリブのやりとりが面白い。キャノン 518 も活躍する。

以上でロンバケの出演するカットの撮影は終了。記念にスタッフ、キャスト全員で記念撮影をする。
KERAと中野はレコーディングを続けるため、ドラゴ達と握手をして別れる。

どうもお疲れさまでした。残りの方々は、せっかくのOFFなので、これから買い物にでも行くとのこと。
みのすけが、いまだに連絡がとれないティエリーからのメモを見せてくれる。レンタカーに忘れたみのすけのサ
ングラスを、ロンバケ達が宿泊しているアパートに、届けていたのだそうだ。メモには「最後までがんばって下さ

い ティエリー」 と書いてある。みんなで苦笑する。

橋の上に移動し、いくつかのインサート・カットを撮る。フィルムの残尺をつぶすため、久保山氏と私もほんの数秒分写る。それでもまだフィルムが残っているので 欄干にとまっている白いハトを撮る。ボリスが脅かして飛び立たせる。これがクランク・アップ・カットになった。

以上すべての撮影が終了。

その足で、皆と別れて、現像所へ。明日の午前中にあがるとのこと。そして、ドラゴとボリスは10時間くらい車を走らせてベルリンへ帰っていく。ボリスが来週、現像が無事出来たかどうか、日本に確認の電話をしよう。

冗談で、次は東京で会おうと言う。彼らは、今回のこの撮影に関してどう感じているのだろうか。いつか、聞けたらいいと思う。さようなら。なにはともあれ終わった。皆様、本当にご苦労さまでした。

我々は、とりあえずホテルにもどって荷物を降ろす。昼食にホテルの近くの中華料理店へ。撮影中は久保山氏ともども食欲なしで、一口くらいでもういいという状態だったのだが、ここに来て食に火がつく。

午後はさすがに疲れたので、眠ることにする。夜起き出して、夕食がてら街に出掛けることにする。FUNACというCD店で、ミッシェル・ルグランの古いベスト盤と、パリに来るときに機内でみた“THE GOOD SON”そして、タンジェリン・ドリームの“炎の少女チャーリー”のサントラをつい買ってしまふ。

その後、“北海道”という日本レストランで夕食を。私は牛丼、久保山氏はカツ丼といった具合。明日は、撮影時おろそかになっていた音の収録をするつもりなので、そのことも少し打ち合わせする。

私がまだ観光らしいことをしていないので、ぶらぶら夜の街を歩いてみることにする。ゲームセンターがあったので、とりあえず入ってみる。ホテルに戻って早々に寝る。

2月25日 金曜日

今日は撮影の時おろそかになっていた音の収録をするため、ロケ場所をもう一度廻ることになる。それ以外でも、面白そうな音はどんどん収録していくつもりである。

まずは、地下鉄の車中の音。しかし、ラジカセをがんがん鳴らした変なおばさんが乗り込んでくる。どうやら布教活動のようだ。さらにレゲエの団が楽器を鳴らしながら登場で、ほとんど使いものにならない。昼食のため、オペラ座で降りる。パリでは有名な“日高”というラーメン屋に落ち着く。店を出て、タクシーで現像所へ向かう。もちろん、その車中でも収録。長い直線を走る音は、KERAのタクシーのシーンに使いそうだ。

現像所で、無事、現像の済んだネガを受け取る。早速そのテラスのベンチで開封して、久保山氏と私は子

供みたいにはしゃぐ。

テルトル広場に移動。こどもの声やら雑踏の音を収録。そしてサクレクール寺院の下の公園で鐘が鳴るのを待つ。

次は東駅。そんなに遠くないので、ぶらぶら歩いていくことにする。途中で北駅があり、一応中に入ってみる。伝統的な東駅と比べて近代的な駅で、ヘッドフォンを通して聞こえてくる音もそんな感じがする。やはり東駅でじっくり収録することにする。

東駅の近くでカメラ屋を発見。なにげなく覗いたウィンドウに、今まで見たことのない8mmカメラが一杯。これはもう買うしかないだろうということで、久保山氏は8台。私も1台買ってしまふ。

夜、最後にロンバケ達に会いに、地下鉄で収録しながらスタジオへ。

2月26日 土曜日

久保山氏と天野恵理子はフランクフルト経由のルフトハンザ航空。私はエールフランス航空なので、成田で再会することを約束し、ホテル前で別れる。

§その後 - 東京

シード・ホールでのイベントが決定する。

題して“Digital Sync.COLLABOLATION”

日程は7月27日、28日の二日間。

久保山氏がパリで買った8mmカメラが、3rdアルバムの小道具に使われる。

この短編映画のタイトルは“ポンヌフから45分”に決定された。

END

これは、PC-98 上の MIFES Ver5.0 で作成し、最終校正は、NIFTY-Serve を介して Macintosh LC520 上で行った。